新発田市　平成 29 年度　第 5 回定例記者会見

１　日　時　　平成 29 年 8 月 7 日（月）午前 11 時～
２　場　所　　ヨリネスしばた 501 会議室
３　内　容
　〇「城下町新発田まつり」
　〇羽越水害復興 50 周年記念シンポジウム
　〇小・中学生による新発田城清掃活動（クリーンプロジェクト）
　〇中央図書館開館一周年記念講演会「まちづくりと図書館」
　〇「潟コン×Komachi 婚活サークル in たいない」
　〇札の辻広場のイベント「キッズランドで水遊びしよう！」
　〇札の辻広場のイベント「しばた平和のつどい」
　〇札の辻広場のイベント「しばた軽トラ市」
　〇「花市」
　〇「高校音楽祭」
　〇市民将棋大会

あいさつ

〇この度の、当市が運営する有機資源センターが生産する肥料に関する事案につきましては、市民の皆様、関係者の皆様に、多大なるご心配・ご迷惑をおかけしておりますことを、この場を借りて改めてお詫び申し上げます。

〇また、報道機関の皆様には、自主回収や安全性の確認に関する報道にご協力いただき、厚く感謝申し上げます。

〇この事案につきましては、今後とも誠心誠意対応していく所存ですので、報道機関の皆様にも、引き続きご理解とご協力をお願いいたします。

〇さて、梅雨が明け、ようやく夏らしい天候になってきました。作物を育てるためには必要不可欠な雨ですが、近年は「ゲリラ豪雨」と呼ばれるように降り方が極端です。

〇かつては「異常気象」だったことが「日常」になりつつあり、日ごろの防災意識をより一層高める必要があると感じています。

○先月の大雨でも、県内では、土砂災害や浸水などの被害があったと聞いています。

○当市でも、赤谷林道で大規模な崩落があり、8月5日に予定していた山開きを中止しました。一刻も早い復旧に向けて、関係機関と協議を進めていきたいと考えています。

○ところで、すでにご承知とは思いますが、今年、当市の中心市街地のまちづくりが、都市再生整備計画に基づく優れた取組に贈られる、「まち交大賞」の「シナリオ賞」を受賞しました。

○あいにく、ほかの公務が重なり、副市長が代理で出席したのですが、先月24日に、その授賞式が東京都内で行われました。

○「まちの顔づくり」の取組が、このような形で評価されたことを、たいへん喜ばしく思っています。

○しかしながら、受賞に気を良くして安穏（あんのん）とばかりはしていられません。「イクネスしばた」がオープンして1年余りになりますが、本当に大事なのはこれからです。

○今後も産学官が連携し、まちなかに賑わいを生み出せるよう、継続して取り組んでいくことが必要であると考えています。受賞に恥じぬよう、まちづくりにまい進したいと思っています。

それでは、会見項目の説明とします。

最初に、「城下町新発田まつり」について

○いよいよ、「新発田まつり」が今月末に迫ってきました。

○昨年は、14年ぶりに市街地花火が復活し、特設会場から約350発の花火を打ち上げました。

○市民の皆様の評判も上々で、「やはり、まつりに花火があるのはいいね」という言葉を数多く聞きました。

○そこで、今年はさらにグレードアップし、約 530 発の花火を打ち上げるほか、新発田城址公園では、和太鼓の演奏で花火を盛り上げることとしています。

○また、今回は新市庁舎「ヨリネスしばた」の完成後、初めての新発田まつりです。いくつかの催しは、「札の辻広場」や「札の辻ラウンジ」で行う計画としています。

○まつりのクライマックス「帰り台輪」では、観覧場所となる「ヨリネスしばた」に向かって一斉あおりを行うこととしており、これまでとは一味違った迫力ある光景が見られるのではないかと思っています。

○市制施行 70 年の記念すべき年に行われる「新発田まつり」です。ぜひ、多くの方にお越しいただきたいと思っています。

次に、羽越水害復興 50 年記念事業記念シンポジウムについて

○ご承知のとおり、下越地方に甚大な被害をもたらした「羽越水害」から、今年で 50 年が経過します。

○そこで、「羽越水害」の教訓を次世代に伝承することを目的に、県や当市を含む関係市町村などが実行委員会を立ち上げ、様々な記念事業を行っているところです。

○その一環として、8 月 27 日（日）に、生涯学習センターで「記念シンポジウム」を開催します。

○当日は、新潟大学の田村圭子（けいこ）教授による基調講演のほか、「羽越水害」の経験者などによるパネルディスカッションを行います。

○当市からは、実際に水害を体験し、先頭に立ってその後の復興に従事された、向中条（むかいなかじょう）地区在住の加藤洋平（ようへい）さんに、パネラーとして加わっていただきます。

○また、アトラクションとして米倉太鼓の演奏があるほか、水害のパネル展示や記録映画の上映、話題の「ダムカレー」の展示など、様々な催しが行われます。

○ぜひ、多くの方に参加いただき、改めて防災の重要性を考える機会にしていただきたいと思います。

次に、市民が自ら企画した事業を 2 つ紹介します。

○1 つ目は、8 月 11 日（祝）に行われる、小・中学生による新発田城清掃活動（クリーンプロジェクト）です。

○これは、本丸中学校の生徒と外ケ輪小学校の児童が、新発田城の櫓（やぐら）やその周辺などを清掃するもので、本丸中学校の生徒会本部が企画し、外ケ輪小学校に協力を依頼したものです。

○生徒・児童には、社会貢献活動としてばかりでなく、新発田の歴史文化に触れ、そして学ぶ機会としていただきたいと思っています。

○2 つ目は、8 月 26 日（土）に、中央図書館の開館 1 周年記念事業として行う講演会「まちづくりと図書館」です。

○これは、図書館の運営に協力していただいている市民ボランティア「イクネスしばたサポータークラブ」が企画したものです。

○当日は、全国 770 館以上の図書館に足を運んでいる、慶應義塾大学名誉教授の糸賀雅児（いとがまさる）さんに、各地の特色ある図書館を紹介していただき、図書館と市民との関わりや、まちづくりと図書館の関係について考えます。

○いずれの催しも、市民が自ら積極的にまちづくりに携わろうとする意識から企画されたものです。ぜひ、市民の頑張りを取材していただきたいと思います。

このほかの情報としては、胎内市・聖籠町と共催する婚活支援事業の第 3 弾「婚活サークル in たいない」の参加者募集があります。

また、札の辻広場のイベントとして、水をテーマにした「札の辻キッズランドで水遊びしよう！」や「しばた平和のつどい」、おなじみの「しばた軽トラ市」があります。

さらに、お盆直前の新発田の風物詩「花市」があるほか、「高校音楽祭」、「市民将棋大会」があります。

ぜひ、1つでも多く記事に取り上げていただき、新発田市を盛り上げていただきたいと思います。

定例記者会見質疑応答概要

新発田市有機肥料センターの問題について

新潟日報　被害額など、臨時記者会見後に、新たに分かったことがあれば教えていただきたい。

市　　長　県から、肥料の安全性についてのデータを開示いただいた。市も独自で調査し、県とほぼ同じデータが出たということで、二重の安全宣言となった。今月 10 日に、肥料を買っていただいた皆さんに対して、説明会の開催を案内している。村上市が近々行うそうだが、村上市の対象者が 80 人に対して、当市は 1,800 人ということもあり、10 日にならざるを得なかった。もう一つには、新発田市だけだと思うが、肥料の安全性に加えて、その肥料を使ってできた農作物の検査結果も 10 日までには出るということで、説明会を開催すると同時に、完全安全宣言を出せるのではないかと思う。損害に対する補償等については、まで出ていない。10 日に皆さんの話を聞かせていただき、魚沼市や南魚沼市では、被害に対する補償も含めて話が進んでいるようなので、その動向を見ながら、少なくとも他市に劣るようなことは全く考えていないので、その辺りを含めて検討させていただきたい。

産経新聞　肥料取締法に違反していたというのは、新発田市だけではなく、各市がそうである。法に触れたことは正さなければならないが、特殊肥料や普通肥料の登録のあり方や、系統図が非常に複雑になっている。もう少し簡略化したほうが良いのではないかとか、現行の法体系や登録制度に対する所見を聞きたい。

市　　長　県と国で基準に少しずれがあるようで、そうした紛らわしさは当然あるが、そのことが今回の案件から学ぶべきことではなく、明らかに市の職員の感性の問題だと思っている。特殊肥料には、凝集促進剤を入れてはいけないというより、汚泥が入ってはいけないということである。凝集促進剤は、汚泥を固めるために使うものである。特殊肥料に汚泥を入れてはいけないというのは、当たり前のことである。汚泥が入る場合は、普通肥料にな

る。実に単純なことである。車の運転の講習に行くと、「だろう運転」、「かもしれない運転」ということを言われる。それと同じように、「入っていないだろう」という思い込みが一番の原因だったのではないか。「かもしれない」と考えれば、その都度チェックする、あるいは県から通知が来た時に、現場に降ろして、現場できちんとチェックする、こういうことさえしっかりやっていれば、今回のようなことはなかったわけである。制度そのものの複雑さというよりは、職員の感性に問題があったのではないかと思っている。

産経新聞　感性、もしくは意識ということか。

市　　長　その通り。

新潟日報　凝集促進剤は、業界では普通に使われているものだと聞いたが、だとすれば、なぜ入っているかもしれないという風に意識が向かないのか。

市　　長　私自身も不思議である。当市だけではなく、県内他市もそうだった。当市の職員だけが意識がなかったということではないということである。どうしてなのかというのは分からない。職員に聴取したら「汚泥が入っているとは思わなかった」ということであった。確認したかどうかを尋ねたら、「当然入っていないと思っているから、改めて確認はしなかった」ということである。当市だけでなく、他市もそうだということなので、やはりアンテナが機能していなかったというか、意識が低かったと言わざるを得ない。そういう意味でも、ご迷惑をかけた皆様には、誠心誠意対応させていただきたいと思っている。

市内の中学生が自死した問題について

産経新聞　これは、新発田市に限ったケースではないと思うが、亡くなった生徒の親から「学校は何もしなかった、学校に殺された」というような、学校に対する不信感がダイレクトに伝わってきた。決して新発田市だけの事例ではなく、全国各地で、このような

問題で学校に対する不信感、あるいは教育委員会に対する不信感がある。学校の在り方であったり、第三者委員会が立ち上がったら委ねざるを得なかったりなど、構造上の背景もあると思うが、その辺りについて、どのように感じているか。

市　　長　　改めて、若く尊い命を救うことができなかったということは慙愧に堪えない。ご遺族から第三者委員会に対して要望書が提出されたことは、教育委員会から聞いている。学校側とご遺族の間に、少し齟齬があるということも報道を通して聞いているところである。この事案が発生した段階で、すぐに教育委員会には、学校と一緒になってこの問題にあたるように、そして、隠したりすることのないようにと指示をしたところである。しかしながら、ご遺族にとっては、大事な息子さんを亡くされたわけなので、十分な対応が取られなかったと受け止められたのだろうと思っている。学校は、学校なりに対応したつもりでいるのかもしれないが、やはりご遺族にとっては、それを払しょくするだけの対応ではなかったと受け止められたのだろうと思っている。これからは、その分も含めて、第三者委員会、教育委員会、学校がしっかりと、ご遺族の意思を尊重して、迅速に、そして丁寧に対応するように、改めて指示を出したいと思っている。

羽越水害について

北陸工業　　羽越水害から今年で 50 年ということで、当時の様子で覚えていることはあるか。

市　　長　　「7・17 水害」のときは中学校 3 年生で、「8・28 水害」のときは高校 1 年生だった。私の地元の菅谷地区は、たいへんな被害を受けた。平場は湛水だったが、山手は激流に飲み込まれて、床上浸水であった。坂井川が崩れる姿を見た。夕方だったが、「堤防を越えたな」と思って見ていたら、幕が開くように堤防が開いて、前から水が押し寄せてくると同時に、不動尊の後ろの沢から鉄砲水が来た。曲がりくねった川だったため、どこかの橋に木の根が詰まったようで、後ろ側からも濁流が来た。父

親が消防団の幹部をしていたので、1 週間以上帰ってこなかった。20 歳の兄がいたので、「お前たち 2 人で家を守れ」ということで、母や姉、おばあさんが避難所へ行き、兄と 2 人で心細く家を守った記憶がある。そういうつらい思いをした。

イクネスしばたの 1 周年について

新潟日報　イクネスしばたができて 1 年経ったが、改めて、まちの変化などの成果と、これからどういうことが必要になるかという課題を聞きたい。

市　　長　苦労して造ったという言葉は当てはまらないが、あの場所に図書館を造ると言ったときに、少し厳しい意見をいただいたことは事実である。今の開館状況や、子どもたちがあれだけ利用しているという実態を見ると、「良かったな」というのが率直な意見である。新発田高校の校長先生から、たいへんなお褒めの言葉をいただいた。今までは、優秀な中学生はみんな新潟へ行ってしまうと嘆いておられた。東大や京大などへの進学はほとんど難しかったが、今回、多くの子どもたちがそういうところへ挑戦したという話をお聞きした。特段、学校が何か変わったことをしたわけではなく、変わったとすれば、学校が終わってから勉強する場があった、まさにイクネスしばたのおかげだということを、校長先生に言っていただいた。そのこと一つをとっても、たいへんうれしく思っているし、イクネスが満杯になると、ヨリネスまで高校生・中学生が来て、試験の時期はいっぱいになる。まちの中に公共施設を持ってくる、コンパクトシティという考え方は正しいと思っている。

新潟日報　課題はあるか。

市　　長　今のところ、現場から課題は聞いていない。まだまだ、改良や創意工夫しなければならないところは、たくさんあるのではないか。今のところ総じてうまくいっていると思っている。1 年を振り返ってみて、館長から次へ向かうという意味での課題の報告があるかもしれない。

放射性廃棄物処分場の「科学的特性マップ」について

産経新聞　先日、マップが公表されたことに伴って、市長からコメントをいただいたが、県知事や各首長のコメントの中でも、二階堂市長のコメントから最もダイレクトに拒否反応を感じた。改めてコメント願いたい。

市　　長　原子力発電を、推進するにしても、廃止するにしても、避けては通れない課題である。新発田市は、福島県からの避難者についても、県内で事故があったときの受入れについても、そういう役割はきちんと演じている。最終処分場の適地として指定を受けたが、国からそういう相談があっても、まったく聞く耳は持たないし、全く考えていない。